

【研究報告】

ブルキナファソにおける野球の普及について

瀧元 誠樹・増田 敦

金 誠・東原 文郎

出合 祐太

一、はじめに

本報告は、ブルキナファソ^{*)}における野球の普及について、その過程と意義を考察したものである。研究のきっかけは、二〇〇八年度と二〇〇九年度にわたり文化学部OBの出合祐太が青年海外協力隊にてブルキナファソへ野球普及の隊員として派遣されたことである。オリンピック競技から外され、独自に世界選手権を開催しながらグローバル化をはかる野球界が、アフリカにどのようにして広まっていくのか、その過程を確認し、その意義をまとめることを目的に始めた。二〇〇九年度には札幌大学研究助成を受けて、八月五〜七日にかけてブルキナファソ野球・ソフトボール連盟ンジャイ・イブライム連盟長と代表サワドコ・ブツカレコーチを札幌に招聘し、交流する機会を得た。これとあ

*1 ブルキナファソ

西アフリカに位置し、国名は「高潔な人々の国」という意味を持つ。人口一五二〇万人で主な産業は綿花栽培や牧畜などの農業。公用語はフランス語で、現地語は、モシ語やジェラ語など六十を超える。滞在邦人は一〇〇名あまりだったが、二〇一一年五月には近隣諸国の政情不安を受けて日本へ帰国させられている。ブルキナファソでのスポーツで最も盛んで日常的に行われているものは、サッカー。ほとんどの子が休み時間になるとグラウンドでサッカーをしているという。その他に、バスケットボールやバレーボールが人気。ハンドボールや柔道、空手、テコンドーなど二十六のスポーツ競技連盟があり、二〇〇九年にはフュンシング連盟が創設。プロスポーツはない。

わせて、研究者一同も参加したブルキナファソ野球を応援する会やアフリカ野球友の会によって現地の野球少年少女を招くことも実現した。それによりブルキナファソにおける野球の普及という歴史的な出来事に、直接的に関与できたことは大きな収穫であった。本稿は、その考察をまとめたものと二〇〇九年八月五日に開催した北方文化フォーラム「ブルキナファソにおける野球の普及について」で、瀧元と出合との対談の一部を加筆して掲載したものである。

二、野球の世界とブルキナファソにおける現状

さて、世界において野球はどれくらい根づいているのだろうか。国際野球連盟 (INTERNATIONAL BASEBALL FEDERATION) に加盟しているのは一二九ヶ国地域を数える。この数字を多いと見るか、少ないと見るかは対照を何にするかで違ってくるだろう。グローバルなイベントとなったオリンピック大会を軸にすれば、周知のように野球はまだ普及が進んでいないためもあって競技から外されている。二〇一六年オリンピック野球競技復活キャンペーンは声なく全日本野球会議オフィシャルサイト上 (<http://www.japan-baseball.jp/japanbaseball/2016.html>) に浮かぶだけで、その復活の兆しは見えないままである。それでは、野球の普及はどのよう[★]にして進んでいるのだろうか。ここでは、アフリカ・ブルキナファソの野球普及[★]について簡単に触れてみたい。

二〇〇九年八月にブルキナファソ野球・ソフトボール連盟ンジャイ・イブライム連盟

*2 アフリカの野球状況

アフリカ野球連盟加盟国は、カメルーン、ガーナ、ケニア、コートジボワール、ナミビア、南アフリカ共和国、ナイジェリア、ザンビア、ウガンダ、タンザニア、南スーダン、ブルキナファソ。南アフリカ共和国が一番進んでいて、約六〇〇〇チームあり野球連盟登録者数は七万人を超える。しかし、アメリカや日本などで野球をするところまでは進んでいない。

長と代表コーチを札幌に招聘し、交流する機会を得た。この招聘は、瀧元のゼミOBである出合が青年海外協力隊野球隊員として派遣されたのをきっかけに、イブライム氏と出合の熱意から実現した。この招聘ではブルキナファソで野球を始めた少年少女十二名も来道した。日本への招聘や現地での普及の様子は、縁があつてテレビ番組でも何度か取りあげられたのでご覧になった方もおられるかもしれない。

ブルキナファソにおける野球の歴史は、イブライム氏が一九九九年に仕事で訪れた隣国マリでベースボールを目にすることから始まる。友人たちとベースボールを覚えて持ち帰り、仲間を増やし、子供たちに教えながらなんとか形を整え、二〇〇四年にはブルキナファソのスポーツ余暇省下にベースボール・ソフトボール連盟を立ち上げた。翌二〇〇五年には国際野球連盟へ加盟している。二〇〇七年には北京オリンピック大会の野球競技アフリカ予選にブルキナファソ代表が出場し第三位の成績を収めるが、じつは野球のルールを把握している監督やコーチはいなかったという。

アフリカ・ベースボール&ソフトボール協会によれば、一九九〇年に九ヶ国が参加して設立しているにもかかわらず、一九九二年の第一回アフリカ選手権大会にはジンバブエ、南アフリカ共和国、ナイジェリア、ザンビアの四ヶ国しか参加していない。ここからみても、名ばかりの組織・チームしか存在していなかったことが想像できる。

そこで、イブライム氏は、ブルキナファソや西アフリカにおいて本格的に野球普及を進める意志を持ち、青年海外協力隊野球隊員を招聘したのである。そして、指導者・審判講習会を催しルールや指導法を学び直し、子どもたち向けには体験イベントや野球の試合の上映会を催し新たなチーム作りをはじめた。ブルキナファソでは、野球はほとん



手書きのダイヤモンド

どの人にとって初めて目にするスポーツであり、野球専用グラウンドはアメリカ領事館の敷地内にしかなく、空き地を整地して手書きのベースでダイヤモンドを作っていた。日本からの物的支援も増え始めると、子どもたちにはグローブやボールの手入れや修繕をしながら用具を大切にすると感謝の心を持たせ、野球を通じての教育が始まる。子どもたちは声をそろえて「チームワークとコミュニケーション力を学んだ」という（NHKBS11「地球アゴラ」二〇一〇年四月十八日放送より）。学校に通うようになり、時間や約束事を守るようになった子どもたちの姿を見て、親の野球に対する見方も変化し始め、単なる遊びと見なされていたものが、教育的にも有意義な野球として地域に根づきはじめたという。

さらにブルキナファソに野球を根づかせていくために試みられたのは、子どもたち自身による野球教室とリーグ戦の開催であった。子どもたちもつ感性と表現力は想像以上に豊かで、出合が教えるよりも伝わり方がはるかに早く、また的確だったという。そして、小さくではあるが野球をする裾野は広がり、二〇〇九年には少年少女による四チームで四ヶ月間のリーグ戦を開始するまでになった。二〇一一年には高校でのチーム育成が進む予定とのことである。

*3 二〇〇八―二〇〇九のブルキナファソにおける野球関連スケジュール

二〇〇八年

四月 全国のコーチを集めルール講習会を開催

五月

十二歳以下西アフリカ野球選手権大会開催、ブルキナファソは準優勝
ブルキナファソ全国大会を開催

九月

少年少女野球チーム「ゲン」を創設

十月

技術講習会

十一月

ゲンゲン初の練習試合

十二月

野球用具（バット、ホームベース、トンボ、バックネットなど）作成

二〇〇九年

十三歳以下の少年少女野球大会開催

大会開催

これまでブルキナファソでは全国大会は一つで、年齢別のカテゴリーがなかった。十二才から十九才までの選手が混在していたので、技術や体力的に大きな差がみられていた。そこで、年齢別の少年大会をおこなった。小学校にて野球説明会開催
五月 学校祭などのイベントで、

三、北方文化フォーラム

「ブルキナファソにおける野球の普及について」より

瀧元…ブルキナファソで青年海外協力隊員として野球の普及活動に当たっている出合祐太さんと、ブルキナファソにおける野球の普及について考えていきたいと思ひます。

出合…よろしくお願ひします。

瀧元…さっそくですが、なぜブルキナファソで野球なのか？ あらためて考えてみたいと思ひます。出合さんがなぜブルキナファソで野球を普及しているのかといへば、ブルキナファソでは二〇〇四年にベースボール・ソフトボール連盟が成立されてはいるけれども、競技者も指導者も未成熟であるという、現地からの要請に応えたものであるというものが一つの答えでしょう。そして、ベースボール・ソフトボール連盟長のイブライム氏を中心とした野球愛好家らの熱意によるものだという答えが加えられるでしょう。

しかし、「なぜブルキナファソで野球なのか？」という問いは、もう少し歴史的な展望を意図しています。いわゆる近代スポーツの伝播過程をそこに見られるのかどうかは気になることです。近代スポーツの受容は、新しいスポーツ種目を覚えるだけではなく、少なからず当事者の心身さらには社会を変容させる契機となっているから

野球のデモンストレーションを行う

十二歳以下西アフリカ野球選手権大会に向けた選手選抜とチーム育成

六月 審判講習会開催

七月 ブルキナファソ全国大会開催

八月 十二歳以下西アフリカ野球選手権大会がコートジボアールで開催

九月 女子ソフトボール強化キャンプ

十月 西アフリカ諸国の野球連盟を対象とした技術講習会

十一月 青年チームを対象とした首都リーグ戦を一ヶ月間かけて開催

です。一緒にスポーツを楽しむためには、ルールを守らなければならない、チームワークが大切、適した身体能力が必要といったことが求められます。近代化の歴史は、ときには帝国主義的な展開のイメージと重なりますので、宗主国のスポーツに興じるためには、宗主国のルール法、チームワークに新たな共同体、身体能力労働力のようにその意味するところが横滑りし、支配―被支配の構図に近代スポーツの受容が重なるわけです。

ここで、ブルキナファソが、近代化を遂げていない未開の地であるとか、いわゆる発展途上国や植民地であると言おうというわけではありません。近代スポーツの伝播過程をふりかえると認められる功罪があるので、あらためて野球をブルキナファソに普及させようというときに「罪」がないように、注意しておきたいということです。

また、野球が普及することによって、世界中の人たちと交流できるツールが一つ増えることとなります。ところが、そのツールがじつは中心的パワー、野球であればアメリカの力が強く影響していたり、華々しい成功の裏にうごめく問題（ドーピングや八百長、経済格差）があったりしてはなりません。

さて、もう一つだけ前提となることを確認しておきたいと思います。それは、今も、世界中の人たちと交流できるツールとしての野球という言い方をしました。今年（二〇〇九年）には、World Baseball Classic (WBC) が開催され、日本は見事二連覇を達成しました。アメリカの地で行われている激闘の様子を私達は衛星生中継によって観戦できました。日本のメディアは「世界中の人が注目をしています！」「世界一です！」とうたうわけです。日本にいればあまり疑問を感じないかもしれないこのフ

レーズですが、出合さんは違和感を持ったのですよね。

出合…はい。ブルキナファソではWBCは衛星生中継もされず、WBCのニュースはいっさい流れていませんでした。わざわざVTRを送っていただいて私や野球をしているブルキナファソの一部の子どもたちが観たのです。そこで「世界中の人が注目している」と言われても、そうではないわけですから。

瀧元…少なくとも「僕たちは注目していない」のですよね。正確に言えば「注目できる環境がない」わけで、もっと言えば、ブルキナファソは「世界」に入っていないという事実気付いたということでしょうか。

出合…そうですね。

瀧元…スポーツは、言葉や国の壁を越えて、世界中の人たちと交流できるツールとして普遍的な文化になっていると思います。しかし、そこで言う「世界」とは何を意味するのか、「世界」に入っていないことが何を意味するのか、スポーツを通じてあらためて問い質すことになるわけです。このように、ブルキナファソに野球を普及させるということは、新しくブルキナファソに「世界」を創造することにつながるということ、確認しておきたいと思います。

それでは、ここからは具体的にブルキナファソでの出合さんの活動について、プロ

グ「Bark barka」(<http://burkina.jugem.jp/>)の記事を紹介していただきながら、野球を普及させる意義を考えていきたいと思えます。

まずは、二〇〇八年六月二十九日に「日本の野球」というテーマで次のような言葉がつづられていました。出合君が日本の野球をブルキナファソで普及させるときに何を考えていたのか、その葛藤がよくわかります。

六月から子ども達は夏休みに入っています。それも四ヶ月間。そのおかげで、毎日練習できるようになりました。今、子ども達は少しずつ変化してきています。最初の頃はグラウンドにゴミは捨てるし、時間には平気で遅れるし、バット、ボールは蹴るし、順番は守らない、人のせいにすぐする、ケンカばかりする。他にも色々な問題があります。でもその問題も、今は少しずつ変わってきています。グローブは投げずに手渡し、バットも投げないで手渡し、用具は手入れしています。脱いだサンダルはしっかり並べています。時間にも一時間遅れが三十分遅れになりました。練習中にグラウンドでねころがっていたのも寝ないようにになりました。練習中にチーム内で声の掛け合いが少し出来るようになりました。

少しずつですが変わっています。ただ、その中で、本当にわかってもらえない子には胸ぐらつかんだり、「目見て話を聞けー」と怒り、家に帰らせたり多々しています。

正直厳しいかと思えます。もしかしたら野球に来なくなったらどうしようとかも思ったりします。でも、自分の野球を賣こうと思えます。

何でも許していたらここで日本人が日本の野球を教える意味がないから。

だから、うるさいかもしれませんがしつこく言い続けています。でも、自分もそれだけ言うだけのことをしななければいけません。時間には絶対遅れない。グラウンドをキレイにする。用具は大切にします。

野球が好きなんだという想いを伝える。(これが一番大切だと思います)

大きな喜びがあるから、たくさんある規律も守れる。「頑張れる!!」

そう思えるようになれば、彼らは将来も立派な大人になると思っています。

野球選手以上に人として、将来のリーダーとなるべく人に導きたいと思えます。

どう思いますか？ 自分の考えはおかしいでしょうか？

正直ここまで人を説教して、罵声をあびせて、時々不安になります。きっと、今の日本では受け入れられないかもしれません。

それでも、信念を貫きたいと思えます。

他のところでも、「日本人の僕が、日本の野球をブルキナファソで教えることは、いいことなのか？」という言葉がありました。出合祐太個人の考えであり、出合祐太の教える野球なのに、「日本人」として「日本の野球」を教えるという意識になっていきますよね。もちろん日本人に違いはないのですし、海外では日本人としてのアイデンティティを強く意識するのはよくあることです。それでも、ずいぶんこういった葛藤をこの頃はしていますよね。

出合…そうですね、赴任した当時は、本当に葛藤していました。彼らの野球はアフリカの野球であって、日本の野球を押しつけるようになるのはいいか悪いのか、考えさせられました。あまり自分の気持ちを強く出せず、引いていた頃もありました。

龍元…前提として、「僕は日本人だ」という気持ちがあるわけですよ。

出合…ありました。

龍元…そして、「ここはブルキナファソなんだ。彼らは日本人とは違うんだ」と思う。

それは当たり前ですよ。言葉も習慣も全てが違うわけですから。でも、野球というスポーツは同じように思うのですが、なぜ「アフリカの野球」や「日本の野球」と感じたのですか？

「何が「日本の野球」なのでしょうか？」

出合…「日本の野球」は、独特だと感じています。

それは、礼儀を重んじて、道具にも思いを込め、仲間や相手を尊重するという姿勢があることです。僕は、小学校の頃からずっとそれを教わってきましたし、今思えばすごく大切なことだと思うのです。それは、野球の世界だけではなくて、社会でも大切なことだと思っています。

龍元…なるほど。出合君が行ってきた野球を伝えたい、仲間を尊重する大切さを伝えたいということは、七月二十八日の「技術と心」と題した記事にも読みとれるところですね。

今日は青年チーム（ナショナルチーム）の練習です。現在木曜の夕方と日曜の午前中に行っています。各々仕事があるので日曜日が集まり易いため、ほぼ週一回の練習になってしまっています。ですので、出来る限り実戦に近い技術をどんどんやっています。

守備では、サインを使った牽制、バント処理のフォメーション、内野手のフィールディング（捕球から送球までの動き）、ダブルプレー、外野と内野の連携、バックホーム。バッテリー間のストレッチ、変化球の組み立て方など。

打撃では、スイング、身体の使い方、タイミングの取り方、ボールの打つ位置など、出来る限り、新しいことを伝えることにしました。それを彼らは三時間程度の練習の中でどんどん吸収していき、うまくなっていくのがはつきりわかります。成長しているのが目の前で見えるこれ以上の喜びはないですね。バッティングでは自分のポイントでしっかりボールを呼び込んで振れる選手も多くなり、飛距離もかなり伸びてきまし



破れたボールを縫い繕う

た。

今までの練習の中でも今日はかなりしっかりと集中していましたが、もう少しというところで、だらけ始め、集中力も全くなくなってしまい、自分の練習が終わったとかで勝手に休み、遊んでる状況になってしまいました。

これに対し、本気で激怒しました。言葉も強く言いましたが、手も出してしまいました。僕もいき過ぎたと選手に謝り、選手も謝っていました。選手の疲れが見えていたのは気づいていました。いいところで今日はやめておけばよかったのか？それともこのように続けてもよかったのか？

この一回の練習に欲張りすぎました。

ここは日本じゃないですから、もっと考えて選手にとって最善のメニューを考えていかなければならないと反省しています。

もう少しでした。

途中までよかっただけに本当に残念でした。

練習後、選手達だけでミーティングを行いました。「自分達の野球への心構えを反省し、時間にも遅れずに来ることを約束し、全員で練習を始める。」「練習のときは練習を、休憩のときに休憩をする」「今後ともよろしく願います」とのことでした。

正直、これでよかったのか？

彼らは野球を楽しめればいいのではないのか？

きっとそう思っている選手もたくさんいるはず。どこまでこの日本人に言われなくてはいけないのか？

考えさせられます。

でも、

技術だけじゃなく心も…、

「心」が大切なのです。

自分がやってきた野球を伝えたい。

自分が今までやってきたことに誇りを持っています。

迷いはないです。

来週もがんばります。

この記事を読むと、胸打つものがあって、「頑張れ！」と応援したくなりますね。ただ、どうなのでしょう。出合君の中にある「日本の野球」という思いが、ブルキナファ

ソに伝わるということはどういうことなのでしょう。そもそもアメリカで生まれたベースボールが、日本に伝わってきているわけです。それが、「日本の野球」に変容しているとしたら、同様にブルキナファソではブルキナファソの野球が生まれてくると考えられます。実際に、先ほども「彼らの野球はアフリカの野球」と言われていました。とすると、記事にありますように、野球という技術を普及するかたわらで心の部分を伝えたい、心が大切であるというわけですよ。とすると、衝突してしまうのは当然なのかもしれません。

でも、九月十四日の「イヤです」という記事では、雰囲気が変わってきましたね。

このままの調子で続けばと思っていた矢先…。

一難去ってまた一難です。

最近、練習中子ども達の中で一人孤立する子がいます。

その子はあまり上手ではなく、皆から「メシヤン」（いじわるなやつ）って言われています。僕は本当は優しい子だっというのは知っています。

でも、人一倍プライドが高く素直になれないところがあって、自分から「キャッチボールしよう」とかお願い事ができないんです。他の子ども達から何か注意しなくても、プライドが邪魔して素直に聞こうとしないんですね。プレー中もミスがあっても「あいつが悪いからだ」「グローブが悪いからだ」って言っています。そんな

こと繰り返してゐるからか、まわりからも拒否されています。

ある練習でその子がミスしました。それを見てまわりが笑ってました。僕はこういうのが本当に嫌いでマジギレです。今回のはすごかったです。彼は一生懸命でした。

一生懸命のミスはいいんです。そこに改善の余地があるからです。そういう頑張ってるやつを笑うのが一番嫌いです。

自分は周りの選手に言いました。

「笑うときはいいプレーの時だけ！」

「仲間のミスを笑って何がおもしろいのか？ おもしろいのはお前らだけ」

「お前らがこつこつしているからあの子はメシヤンって言われるんだ」

「お前らがメシヤンだよ」

「あの子を助けてあげようよ。そうしたら、あの子が君らを助けるよ」

「その時が本当に笑うときだと思つ」

「そつこつチームが本当に強いんだよ」

言い切ってもムカつきは収まらず、今日は途中で練習を切り上げました。練習を見ていた選手の親が「子どもだからそつこつまくいかないよ。教えるのは難しいもの

だからね。上手じゃない子はやめさせればいいじゃないの？」って言ってきました。

「親がそんなこと言ってるから子どもが大人になっても、ろくな大人にならないんだよ。今が重要なんだよ！」「馬鹿たれ！」って言ってしまいました。「馬鹿たれ！」は日本語でしたけど。

そのあと子ども達と和解し、理解してくれたようです。また頑張っていきたいと思いません。

一つおもしろいことはですね。あの時に本気で嫌気がさして、「グローブ、ボールあげるから、持っていていいよ！」「好きにしたらいいさ！」っていったら

「イヤです」でした。

その答えは意外なものでした。あんなにも皆が「グローブほしい。ボールほしい」って言ったのに……。

一緒じゃないとイヤだそうです。

一緒に野球がしたいそうです。

もっともって教えてほしいそうです。

泣きそうになりました。

本当は可愛くて可愛くてしょうがないんです。

いい子達ばかりだからこそ厳しくなってしまうですね。正直、この子達が今一番の希望の星ですから。どんどん成長していく彼らが希望です。

こうして親御さんとも張り合いながら、心の大切さを説こうとされています。ここまでくると、日本の野球と言うよりも「出合祐太の野球」をブルキナファンに根付かせようという意気込みを感じますよね。全身全霊でぶつかっているのだと感じます。技術だけではなく、心を教えたい、と。

出合…最初は、野球を上手くすること、そのためには技術的なことを毎日の練習を考えて、実践していきました。でも、上手くしようと考えれば考えるほど、最終的に届くのは心の部分だったんです。野球というのは常にパートナーがいる。どれだけ速い球が投げられるようになったとしても、相手を受け取れなければプレーにならない。だから相手を思いやる心がなければ、プレーが上達しないということを指導していくなかで感じました。



プレイボール！～歴史の幕開け～

瀧元…関係プレーをするにしても、そこで必要とされるのは運動技術だけではなくて、コミュニケーション能力もあって、練習するときには相手を思いやる心が上達に反映するということですね。

出合…反映しますね、確実に。

瀧元…そうした心を培うこと、野球を教えることを通じて、子どもたちの成長を見守っていることが親御さんにも伝わっていきます。最初は、親にしてみれば知らない日本人の青年が子どもたちを引き連れて何をしているのかわからない、野球を知らないのですから。そして、子どもたちを叱りつけているのを見れば、とまどいより怒りに近いものがあつたのではないかと思えます。そして、その親御さんたちとも衝突をします。正直に思いを伝えたくても、言葉も操れない時期ですからよけいによつかり合ってしまう。

日本語で「馬鹿たれ！」と言ってしまったとありましたが、日本語であつたらこそ、心の叫びが一番伝わつたのではないですか？

出合…そうですね。

瀧元…でも、そうして正面からぶつかり合つたことが逆にいい方向に進んでいきましたね。子どもたちは普段なら考えられないような、朝の七時、ときには六時に練習に来る

ようになってきます。それも毎日来るようになってきたのですよね。

すると、親御さんにしてみれば、真面目に子どもたちが「野球」というものをしに行く、それも朝早くに、…

出合…ご飯も食べずに、…

龍元…きっと意気揚々と出かけるのでしょね。その姿を見て親御さんはきっと出合君のしていることに理解を示し始めていったのでしょね。そこで、自分のしていること、野球を通して何を教えようとしているのかを、親御さんを集めて話をしたんですよ。そのときの反応はどうでしたか？

出合…正直に言う、「それは無理だ」と…

龍元…何が無理なの？

出合…「あなた、日本人がブルキナの子どもたちを変えようとするのは無理」だと言われました。

ただ、毎日、本当に毎日、野球をやってきました。一年間に満たない間でしたが三三三回練習をしました。そうしていくなかで、そのうちに「あなたのこととはすごく素晴らしいことだから、ぜひ続けてほしい。私達ブルキナベが子どもたちを変

えることはできない。」とおっしゃってくれました。

瀧元…最初は、「日本人であるあなたには変えられない」と言われていたのに、ついには「私達には変えられない。あなたになら変えられる」と言われるところまで来た。そういう信頼を得られるところまで来ている。正直、僕は「やられたなあ。こういうところまで来るんだ」と感嘆しています。

ある一青年が、裸一貫、自分の持っている技術と強い想い一つで、海外に飛び出して格闘していく姿。しかも、現地の人に「あなたになら」と子どもたちを託してもらえる。

こういう言葉もありました。

「ユウタが、グランドでしようとしていることがわかる」

「グランド」なんですよ。出合君はおそらく日常生活に入り込んでいったわけではなくて、自分の「グランド」を造ってそこで勝負をしてきている。文字どおりゼロから造ったんですよ。野球場がないのですから、草をむしり、石を拾い、土を入れ替えて整地をしてきた。整地用の用具まで作りながら。

朝早くに「グランド」に出て、いつ子どもたちが来てもいいように準備をして待つ。待っていると一人二人と子どもたちが集まってきてくれる。

こうした活動を見ていて、本当にすごいことをしているなあ、と感じています。

ブルキナファソの野球の歴史を創っている、生の現場を観させてもらっています。こうした活躍をしていることが羨ましくて、そしてすごく嬉しいですね…。

出合…ありがとうございます…。

龍元…ブルキナファソに野球を普及する、その活動は、こうした個の現場から始まっています。

そして、今回は、この活動に呼応する形で、ブルキナファソからベースボール・ソフトボール連盟長のイブライム氏をはじめ選ばれた野球をする子どもたちを招聘することになりました。それは、札幌大学の野球部・OB会の皆さん、出合君の故郷である富良野の有志の皆さんや野球チームの子どもの交流を通じて、さらにブルキナファソに野球を、私たちの想いを届けたいという願いからです。

出合君の奮闘やVTR観戦で、ブルキナファソの子どもたちは野球を知っているかもしれませんが。でも、打球音や伸び上がる飛球の軌道、スピードを直接感じてもらうことが、本当の意味で野球に触れることが、重要だと感じたからです。この招聘によってブルキナファソの野球が変わるはずです。

また、私たちにとっては、当たり前のようにして野球のできる環境があることをブ



ブルキナ野球の原石

ルキナファソの子どもたちとの交流を通じて再認識する意義があり、遠く離れた西アフリカの地に野球が伝わっていく生の現場に立つことが私たち自身をも変えることになると思うからです。歴史的な出来事がブルキナファソで起こっている、その「今」を共有することに意義がありますよね。

出合…そうですね。今回一緒に来日したイブライム氏、そして子どもたちがブルキナファソの野球を担っていてくれます。僕が帰った後、彼らになら託せます。

今日で来日して三日目ですが、確実に成長しています。日本の野球を学んでくれます。果敢に挑戦をしてきています。

彼らが必ず歴史を創ってくれと、そう思います。

灌元…歴史を創ってくれる、その一点に意義は集約されますよね。

真摯にスポーツに取り組む一人の想いから、子どもたちが、歴史を創り、「世界」を創っていく力となること、それがスポーツの力なのでしょうね。

ブルキナファソに野球を普及させることは、歴史の創造の現場に立つことだとと言えるでしょう。

四、今後のブルキナファソにおける野球の展望

野球の歴史が浅いブルキナファソでは、指導者や選手の開拓、育成など必要であり、

青年海外協力隊員のような普及活動は欠かせない状況にある。とはいえ、今回の研究報告を通して感じられたことは、出合の活動によって伝えられた野球は、確実に根づき始めていることである。二〇一一年五月現在アフリカにおける政情不安はブルキナファソにも影響し、出合の後任である青年海外協力隊の野球隊員も着任早々帰国を余儀なくされている。それでも、ベースボール・ソフトボール連盟による普及活動は続けられ、高校にチームができ、リーグ戦開催計画が立ち上がっている。そして、何よりも子どもたちは自分たちの力で野球に取り組んでいるという。

最後に、グンゲンに所属し来日もしたムスタファから出合に届けられたメールを掲載し、本稿を終えたい。

slt yuta et tes parents ils vont bien. On continue de jouer au baseball. on s'entraîne toujours on vient de jouer le championnat et on a gagné. Le match était gougghin vs paspanga, on a gagné 2-1. J'espere que tu es content et les japonais aussi. Salut aussi Aska CHINTARO ET LES AUTRES.

「僕たちは野球を続けているよ。練習は毎日してる。

リーグ戦はグンゲンVSパspankでニーで勝ちました。

僕はあなたや日本のみんなが喜んでくれていると思っっています。

アスカやシントロや他のみんなによろしくー!」